

C—50 日本人青年女子の肌色の季節の変化
について(第3報)
—北海道地区における—

東京家政大家政
北星学園女短大
東京家政大家政

○木曾山かね
永井 恒子
檜垣 晴恵

1. 本研究は衣服の色との調和を論ずるための資料をつくることを目的とした基礎実験であって、日本人青年

女子の皮膚の色における研究と一連のものである。昨年は第 21 回総会に於て東京地区、名古屋地区の季節の変化を測定、考察し報告したが、今回は北海道地区の青年女子の肌色について、冬と夏の色について測定を行い考察を行った。

2. 測定の方法は視感測定法で行った。測定月日は冬期は昭和45年1月22日～29日、室温は6°C内外、湿度は40%内外、夏は昭和45年6月中旬、室温は23°C内外、湿度は60%内外であった。夏、冬とも皮膚面の照度は450 Lux～500 Luxの間で測定を行った。被験者の年齢は女子19才、人員は100人を対象として測定したが、シーズンを通して同一人が測定できたのは73人であった。被験者の皮膚の状況は化粧をしない健康なる皮膚を測定した。

3. 以上の結果を総合すると次の様である。

- ◎冬期の肌色では7.5 YRが多く、特に明度の高いことが目立ち、次に10.0 YRが多くて同様に明度が高いものが多かった。
- ◎夏の色については全体として10.0 YRが多く明度の高いことが目立っている。次に7.5 YRが多かった。
- ◎東京地区に於ては額、腕の外側に5.0 YRが多くみられたが、そのような傾向がなかった。
- ◎初夏の色を基準として、冬の色との相関をみたが、0.05%の危険率を見込むと腕の外側に明るさ及び色度共に有意の差がみとめられた。